

宝塚市自立支援協議会 専門部会「けんり・くらし部会（地域生活グループ）」
令和元年度活動結果報告

I. 開催日時	【専門部会】	第1回	令和元年6月28日(金)	出席者	9名	14:00～16:00
		第2回	令和元年8月9日(金)	出席者	9名	13:30～15:30
		第3回	令和元年12月13日(金)	出席者	8名	13:30～15:30
		第4回	令和2年2月28日(金)	出席者	7名	13:30～15:30
	【ワーキング】	第1回	令和元年8月23日(金)	出席者	10名	13:30～15:30
		第2回	令和元年10月25日(金)	出席者	8名	13:30～15:30
		第3回	令和2年2月19日(水)	出席者	10名	13:30～15:30

II. 要旨

第1回けんり・くらし部会（地域生活Gr）（01.06.28）

1. 自己紹介

部会長は前年度から続投とする。

新任委員並びに事務局の担当者も併せて紹介した。

2. 自立支援協議会とは（事務局より組織体制について説明）

3. 宝塚市自立支援協議会全体会について

協議会の設置要綱ならびに運営要綱を基に自立支援協議会と部会との関係性について説明を行った。本部会においては「地域生活をする上で困っていることについて」をテーマとし、当事者の困りごとを取り上げ、改善できることや工夫すべきものを協議していく。

【挙げられた課題】

- ・親亡き後
- ・卒業後の進路
- ・公共施設利用に関する設備 等

4. 前年度の振り返り

「地域生活をする上で困っていること」をテーマに当事者からの経験談や思いの聴き取りを行うと共に、具体的な課題について例示し意見交換を行った。

【挙げられた課題】

- ・医療的ケアに対応できる放課後等デイサービス・日中一時支援・生活介護の充実
- ・サービス支給量に関する事
- ・知的障害^がい者、親の高齢化に対応するための共生型グループホーム
- ・高齢になった知的障害^がい者の受け皿
- ・精神障害^がい者の地域移行、居場所づくり
- ・共生型のグループホーム

昨年度の課題解決シートや当事者の声、抱えている事例から課題を出し、優先順位をつけた上で課題解決に向けて協議していくのはどうか。

5. 今年度の部会のテーマについて

地域生活をする上で困っていること

課題を各委員から持ち寄ってもらい、この場で共有し、今からでも取り組めるものに優先順位を付けていく。何らかの結果が出なければ取り組んでいても辛いという意見もあるため、形にできるものを考えていきたい。委員が協力し合っていることを考え、全体会に返していきたい。次回の部会の案内文とともに、意見を記入するためのペーパーを送る。その結果を集約し、次回の協議に活かしていく。

6. 年間スケジュールについて

次回以降は8月・10月・12月・2月に部会を開催する予定である。

7. その他

委員よりデイサービスに関するクラウドファンディングの告知

第2回けんり・くらし部会（地域生活 Gr）（01.08.09）

1. 前回の振り返り

2. 協議

今年度のテーマ『地域生活をする上で困っていることについて』に関する意見交換

【挙げられた課題と内容】

- ・ニーズの把握について（相談支援事業所に聞き取りを行う）
サービスに関連する課題・・・政策提言や要望等は本部会では議論しない。
サービス以外の生活に関する課題・・・「身近に出来ること」に着目し本部会で議論する。
- ・地域とのつながり（交流・集い・参加など）
就学決定にあたって 少し前・・・地域の学校と支援学校を選択できた。
最近・・・支援学校への進学を強めに促される。
- スポーツ・文化活動を通じて障害の有無を問わず交流できる機会がある。
- ・地域での安定した生活
医療との連携・・・少し調子を崩した際の受け皿などがあれば助かる。
不安になった時の居場所・・・障害のある人だけでなく安心できる居場所は有用だろう。
※ショッピングモール等も含め新たな資源を開発したい。
※『孤独な人が事件を起こす』ということも言えるのではないか。
- ・人とのつながり
ソーシャルネット（ゲーム含む）を通じて共通の関心ごとでつながる人もいる。
※リアルな対面がない＝障害の壁がない

【これから取り組みたいこと】

- ・情報（参加・集い・交流・居場所・つながり先の方法）を知らせたい&集めたい
- ・生活の便利（やっていること・医療の拠り所・コミュニケーションツール）を考える
- ・考える&確認する（医療機関間連携・日常的な参加や交流の場）
- ・障害に対する理解を広める（手をつなぐ育成会によるすみれ隊・講演など）
- ・相談支援事業所からの聞き取り（サービス内のニーズ&サービス外でのニーズを把握する）

第1回ワーキング(01.8.23)

1. 精神障害の方が利用できる社会資源に関する冊子作成について

今年度はワーキング開催までにリーダーと事務局で昨年度の協議内容の整理を行い、リカバリーストーリー作成のため、精神障害のある方2名にインタビューを実施した。別途ワーキングの当事者委員に依頼したものと合わせて3名分のリカバリーストーリーを作成している。その上で、リカバリーストーリーの校正と冊子に掲載する退院までのフローやQ&A集、相談窓口一覧表等を盛り込んだ冊子原案を作成した。

(1) 冊子原案についての意見交換

<意見交換の主な内容>

- 原稿が縦書きなら、右開きにすると見やすい。
- リカバリーストーリーの字体やフォントがバラバラなので最終的には統一した方がよい。
- 生活に関すること・・・生活上起きうるトラブルを例示し、「こんな時どうする」という情報もあった方がよい。
- 原案の表紙は宝塚市の地形をイメージしたものだが、フリーで使用できるデータはあるのか。
⇒使えるデータが無ければ、この表紙のようにトレーシングや手書きでも良いだろう。
- リカバリーストーリーの前に、前書き（説明）があった方がよい。
- 相談窓口一覧表の説明が堅苦しい文章。当事者や家族にわかりやすい説明にしてほしい。
- 退院してからの生活のページもシンプルに短く、わかりやすい表現にしてほしい。
例) 服薬管理をしてくれる⇒面倒くさい薬をまとめて見てくれる

健全者と向き合いたくない⇒顔を合わせたくない

孤独で話し相手がいない⇒寂しい。友達がほしい。

○表紙裏のリード文の一文目が「こころの病気にかかった人…。こころの病気によって人との関係がこじれて立ちいかなくなった…」という文章がマイナスな表現で寂しく感じる。

病気にかかりたくてかかった訳ではなく、こじらせたい訳でもないので文章で見ると当事者としては寂しい。ポジティブなメッセージに変えて、「精神疾患にかかったからといって人生は終わりじゃない、諦めるな」というような一文も入れてほしい。

○「薬が合わないがどうしたらよいか」という声は多いので、その対処法をQ&Aに入れてほしい。

○一問一答ではなく、大きなテーマ(Q)ごとにAがあるとわかりやすい。

分かりやすくするため、Qを「こうしたい」という書き方に、Aも話し言葉などの砕けた感じにしてはどうか。

○本人が自分で必要な情報を書きこめるマイページが1ページあるとよい(三田市のあすなろ相談支援事業所が作成した「不安を乗り越えて」も参考になる)。

⇒マイページに支援者の名刺を貼りつけていくのはどうか。

⇒困ったことを書き、その横に相談・対応できる方法の記入や支援者の名刺を貼りつけるとより分かりやすい。

○相談窓口一覧表には、委託相談支援事業所や保健所、「いのちの電話」以外にも相談(電話相談も含め)できるところを書いてほしい。「ぼちぼちくらぶ」や「兵家連」など。

○専門機関よりも本人・家族にとってハードルが低く相談しやすいところとして、当事者・家族グループの情報は相談窓口一覧の最初のページに持ってきてほしい。

○マイページは白紙よりは、マスを作ると記入がしやすい。8マス作っておけば、主治医や訪問看護、福祉担当者等の名刺を貼ることができる。プラスして自由記述できるページを設けておけばよいのではないか。

○冊子のタイトルも検討しないといけない。現状は仮タイトルとして「精神障害の方が利用できる社会資源に関するリーフレット」となっている。

⇒「心の病を経験したら…」もしくは「ほっと宝塚」というタイトルはどうか。

※今後の対応

意見交換の内容を踏まえ、リーダーと事務局で冊子の原稿の修正や追記を行っていく。

冊子の内容やタイトル等の検討は各委員への依頼事項として、事務局より連絡を行う。

例えばQ&Aや相談窓口の紹介文など、当事者や家族にとって分かりやすい書き方についても、各委員に検討を依頼し事務局にて案を集約する。

第2回ワーキング(01.10.25)

1. 精神障碍がの方が利用できる社会資源に関する冊子作成について

前回、提示した冊子原案の修正・追記版についての意見交換を実施し、表紙から順番に内容を確認した。

今回の意見交換をもって意見の集約は終了とし、次回のワーキングでは原稿の完成版を提示する。

<意見交換の主な内容>

○表紙について

・委員より、表紙の素案について2パターンの提示があった。1つは宝塚市の地形を描き、人が手をつなぎ1つの輪になっているもの。もう1つは皆が積み木を一緒に取りあって、積み上げていくもの。

⇒前者は表紙、後者は裏表紙に採用する。

○表紙裏(リード文)について

・この冊子を作製した目的、当事者や家族に伝えたいこととして、「孤立してしまわないように」ということは大事な要素である。⇒リード文に採用する。

・「こころや体に障害があっても…」の表現が気になる。病気、精神疾患なので、「精神疾患を経験したら…」という文言を入れておく方が後のページに記載のリカバリーストーリーにつながりやすい。

・読み手に伝えたいこととして、編集後記があってもいいかもしれない。

- ・「障がい」の「がい」の字を「碍」と「害」のどちらを使うのかを統一した方がよい。
⇒例えば、障害者総合支援法など法律は新たな制度に変わっていなければ、「害」の字をそのまま使うことになる。それ以外のものは「碍」の字を使い、ルビをつけるのが原則である。

○目次について

- ・専門用語解説のページを入れてはどうか。
⇒当事者にとっては文字が多すぎると見づらくなるので、特に難しい用語に限定するべき。
⇒リカバリーストーリーのページ内の欄外に就労継続支援 A 型や Wrap など、難しい用語の説明を簡潔に書けばよい。

○リカバリーストーリーについて

- ・タイトルを個々のエピソードに付けるのか、リカバリーストーリー全体で1つのタイトルを付けるのか。
⇒各自が一番伝えたい言葉があるはずなので、それを個々にタイトルとして付ける。
- ・文中に①～④と小見出しがあるが、必要か。
⇒インタビュー項目に沿った番号で不要のため、削除する。
- ・字のフォントが小さく、見づらい。
⇒標準の 10.5pt から 12pt へ変更し、1 ページ内に 3 段の校正とする。
文字数調整が必要な場合は個々に相談する。

○退院してから地域での生活するにあたっての Q & A について

- ・表現を当事者目線で分かりやすくしたい。
「服薬管理をしてくれる」⇒「飲み忘れがなくなった」、
「家に一人っていると寂しい」⇒「一人でいるより友達といたい」に変更。
- ・横長のフロー図は中心に Q があって周りに A がある図のどちらかに統一した方がよい。
両方あると見づらく感じる。
⇒中心に Q がある分に統一する。中心に Q (本人の思い) を入れて、周りに様々な A (選択肢) を入れていく。
Q にはイラストも入れる。
- ・A にはインフォーマルな資源や場所も入れてほしい。
- ・「当事者」という表記がいいのか、「私」という表記がいいのか。
⇒「私」の表記に統一する。

○相談先一覧について

- ・「兵家連」も記載し、「宝塚家族会」を次に記載する。
- ・相談支援事業所には「委託」の文言を付け加える。福祉サービスを利用しない基本相談の対応もありうるため、計画作成のみを行う特定相談支援事業所までは記載しない。
- ・相談先一覧の掲載ページについて、退院してから地域での生活 Q & A の間に入れてはどうか。最後にまとめて連絡先があるとどこに電話してよいか分かりにくい。

※今後の対応

意見交換の内容を踏まえ、リーダーと事務局で冊子の原稿の修正や追記を行う。
次回のワーキングでは原稿の完成版を提示する。

第3回けんり・くらし部会（地域生活 Gr）（01.12.13）

1. 前回部会の振り返り

部会長の進行により前回の振り返りを行った。

2. 協議

今年度のテーマ

『地域生活をする上で困っていることについて』各委員より知っている課題の交換。

○前回会議で出された意見と「障害福祉計画（第5期計画）・障害児福祉計画（第1期計画）ヒアリング結果」を事務局より紹介し、意見交換を行った。

<情報に関すること>

・年金に関する説明会を学校で聞いて助かった経験がある。

⇒年金に限らず支援学校に在籍していれば情報を得る機会があるが、一般校に在籍していれば情報を得る機会も少ないと思われる。

◆在籍校を問わず「情報を得る機会」「学ぶ機会」があれば良い。

<居場所に関すること>

・平時から出入りのできる「安心できる居場所」の必要性を感じる。

⇒既存の機関・・・地域包括支援センター 『相談の場』としての機能は有している
『拠点』としての機能に関しては不明

◆『認知症カフェ』『地区センター』『きずなの家事業』『光明デイ2階』など、実は今もあるはず。このような場を増やしたい。

<災害時に関すること>

・災害時などに関しては最も混乱する時なので『慣れた場所』に避難できれば助かる。

⇒災害のこと以上にストレスが大きくなるようにする配慮。

◆支援学校も避難所にできないだろうか。

・福祉避難所に必要な機能

⇒ハード面：備蓄品、電力確保など

ソフト面：コミュニケーション手段、情報のキャッチと提供

<就労に関すること>

・早い段階から情報を知ることによって準備ができる。

⇒理想の形：本人・・・自分はこうしたい

家族・・・本人の「こうしたい」を支えたい

支援者・・・必要に応じて新しい仕組みを作り出す

◆例えば『農福連携』などによる就労の形づくりを行う。

<障害^{がい}の理解に関すること>

・モラル面の向上

⇒ごく日常的に「このままで良いのか？」と気付くものがある。

「優先駐車場」取り扱い

「点字ブロック」の設置

「白杖」の理解 など

・心のバリアフリー

⇒見えにくい『困り感』への対応の仕方。

スーパーでの「ゆっくり対応できるレジ」の設置等

- ◆悪意なく「知らない」という理由だけで排除や利用拒否につながっていることもある。
住民だけでなく、企業（福祉系含む）も知らない必要があることを伝える。

<啓発の取り組みに関すること>

- ・啓発イベントを開催しても一般の参加者は多いとは言えない。
⇒『一緒にできる』ということがあれば理解は深まると考える。
スポーツ、芸術、販売 など
『自分には関係ない』という思いをどう変えられるかがポイント。

- ◆新施設開設後の「コラボイベント」に期待。

- ・医療面では認知症等の公演を行っている。
⇒ゲストによっては一般参加者が多い。※受診率向上につながっているかは不明。

- ◆現状として『地域包括ケアシステム』は高齢者に偏っているが、本来は障害者に対する支援に関しても議論できるようになれば良い。

『医療』『介護』『福祉』の顔の見える関係が理想。

『認知症カフェ』に障害者も参加しているという先行事例もある。

『子ども食堂』もあるが、対象者の枠を広げてもらえたら障害者を含む多くの人が参加できる。

- ◆実現するための課題は何なのだろう。

3. その他

- ・11.5 自立支援協議会全体会の報告

第3回ワーキング(02.02.19)

1. 精神障害の方が利用できる社会資源に関する冊子原案の完成版についての確認

冊子原案の完成版について、表紙から順番に配布資料をもとに各内容を確認した。

また、ノートPCとプロジェクターを使用し、すぐに反映することが可能な意見についてはその場でデータの修正を行った。

<意見交換の主な内容>

○表紙について

- ・表紙裏の「差別解消条例」の「害」の字は「碍」になるのか。
⇒冊子の発行時期による。今年度内であれば「害」のままであるが、来年度発行であれば「碍」に修正される見込みとなっている。但し、条例は議会の議決を経なければ正式に改正とはならないため、冊子上の表記については発行時期を見て事務局で協議する。

○目次：特に意見無し

○リカバリーストーリー

- ・3つのリカバリーストーリーの書体が揃っていない。
⇒1ページに3段の構成で、1行あたり19文字とする。フォント、書体、行数を統一するが、見やすくするためにUD体でフォントは12ptに統一する。文中の注釈の※と番号は記載がなくとも問題ないと思われるため、削除する。
- ・(委員)自身のリカバリーストーリーについては、より良い内容に作り替えたものに差し替えたい。
⇒委員より修正後のデータが届き次第差し替えを行う。
- ・難しい用語がまだあるため、注釈を追加してほしい。
⇒「天ちゃん」分には、「地域活動支援センター」、「訪問看護」、「家事援助」の説明を追加する。

「正之」さん分には、「特例子会社」、「障害者手帳」の説明を追加する。
※上記以外について書きぶりの微修正が数か所あったため、その場で修正を行った。

○退院してから地域での生活Q&Aについて

前回の会議で提示したもとの変更点として、横向きのフローは削除し、Q&A方式に統一した。
冒頭にQ&Aが入るとわかりづらいので、「退院して地域で暮らす」ことのイメージ図を追加し、Q&Aのタイトルも変更した。

- ・「退院して地域で暮らす」ページにある木のイラストを大きくし、周りに吹き出して夢を書いてはどうか。
- ・「住む」についてのQ&Aがあってもよいのではないか。
- ・「毎日、自宅で過ごします…」のところに、ヘルパーのことも記載しておくほうがよい。
- ・地域移行の対象は病院だけではなく、救護施設も含まれている。
⇒地域移行を広く捉えてもらえるように、「病院・施設等」という表現に変更する。
- ・タイトルが「デイケアを利用したら…」、「就労継続支援B型・地域活動支援センターを利用したら…」とあるが、サービス利用が前面になってしまっている。「こんな暮らし、〇〇をしたい」という提案型にしても良いのでは。

※上記意見をもとに、別途、リーダーと事務局で再度検討を行う。

○いざという時の連絡先について

- ・「神戸いのちの電話」は神戸市民のみを対象としている可能性がある。
宝塚市民も利用可能か確認が必要。
- ・「兵庫県こころのケアセンター相談室」と記載されているが、「精神保健福祉センター」のことではないかと思われる。確認の上、必要な修正を行う。
- ・「相談支援センター だんぼ」は2月より所在地が変わっているので、修正が必要。

○その他

- ・以前の協議で挙げた「私のいつも、もしもの連絡先」というシートも冊子に盛り込む。
実際に関わっている機関の連絡先を記入するもので、直接（自由に）記入したり、名刺を貼り付けられる様式にしている。冊子の最後のページに追加し、その後が裏表紙となる。

2. 配布先や活用方法について

- ・宝塚市民が入院している精神科病院リストにある近隣の病院には配布したほうがよい。
「こころの医療センター」、「ありまこうげん病院」、「宝塚三田病院」など。
対象となる病院は保健所が把握していると思われる。
- ・地域住民が集まる社協の地区センター等にも置いてよいのではないかと。

3. 次年度の協議事項について

定刻となったため、今回は協議するに至らなかった。
8050 問題、ピアサポートの活用、24 時間 365 日対応問題等を含め、今後の協議事項を検討する。

※今後の対応

意見交換の内容を踏まえ、リーダーと事務局で冊子の最終修正を行い、完成版の原稿とする。
但し、2月29日までは新たに委員からの意見等があれば反映させる。
印刷については年度内の発注が難しければ、次年度早々に行う予定とする。

1. 前回会議の振り返り

部会長の進行により、前回の振り返りを行った。

2. 協議

今年度のテーマ

『地域生活をする上で困っていることについて』各委員より把握している課題の交換を行った。

○意見交換においては次の2点に着目した。

- ① 情報を得る機会は当事者や家族にとって貴重なこと
どのような内容を…どのように…発信することが必要か。
- ② さまざまな「困りごと」は障碍の理解・啓発と強く関連している
(例) 『理解』が進めば『居場所』の拡大にもつながる



『居場所』を拡大することで『理解』も進む

※ 「知らない」という理由で悪意なく排除や利用拒否につながる実態

※ 『イベント』は各種開催されるが、無関心層の参加に至らない実態

<情報に関すること>

○どのような情報が重要なのか

- ◆ 「知っているか知らないか」で生活に差が生じると困る情報

例) 支援学校PTAで実施している「障害年金」の勉強会

効果：前もって知っていることで直面した際に困らない。

現状：支援学校に在籍していない場合には知る機会が確保できていない。

必要な展開：地域校の支援学級に在籍している方にも知る機会を確保する。

直面した時に困らないツールを用いる。

ツール：① 「たからっ子ノート」

- ・ 障碍の有無を問わず多くの情報が掲載されている。
- ・ ライフステージごとに「〇歳の時に△の手続き」などが記載できる。

② 「市広報」

- ・ 情報をキャッチする媒体としては最有力だろう。
- ・ 相談窓口の紹介をページ固定して掲載することが有効ではないか。
- ・ トピックス記事として、新たな取り組みやイベントを紹介してはどうか。
- ・ 特集記事として、その年ごとの強調すべき内容を掲載してはどうか。

課題：高齢者の情報提供の媒体としてはケアマネの存在が上位に位置づいているが

相談支援事業所がケアマネほどの位置付けとなっていない実態がある。

☆ポイント☆

『ケアマネと相談支援事業所との違いは何?』

- ・ 環境の違い：制度の背景（設置基準・配置人員・財源・担当ケース数など）
- ・ 実態の違い：相談支援専門員など従事する個々人の努力？人材の定着の難しさ？

<理解に関すること>

○どのような発信が必要なのか

◆「知って（理解して）もらって」当事者や家族が助かることが重要

例) 発達障害^がや精神障害^がなどの「見えにくい困り感」への理解は進みにくい。

効果：本来受ける必要のない拒否や排除を回避できる。

現状：理解する機会としての実践がある。

- ① 障害^がの有無を問わず参加できるスポーツ活動『障害者スポーツ協会』
 - ② 知的障害^がの疑似体験ができるプログラム『たからづかすみれ隊』
 - ③ 毎年12月に開催される『障害者啓発事業』 など
- 興味のある人は参加していて、一定の理解ができる環境にはある。

必要な展開：興味や関心のない一般の人たちに理解を促すことが難しい。

障害福祉^がに関係している人たちでの議論の場は様々あるが…
無関心層の意見を聞き取る場がないのではないか

ツール：理解できる（障害^がに触れる）機会

- ① 対象者：子ども ⇒ 親へ伝わる効果
学生 ⇒ 「福祉」を入口に障害^がを理解することで
学生の将来のビジョンに良い刺激を与えられる。
- ② 体験による理解 ⇒ 体験で終わらず自身での丁寧な振り返りは有効だろう。
- ③ 理解の場 ⇒ 障害^がという特別枠でなく「参加できる」「居られる」場もある。
一般の人が特に構えずに受け入れられることもある。
例) フットサルチーム など

課題：無関心層の一般住民をどのように巻き込むか？

「協議の場」と「理解の場」へ

◎今回のポイント

- ・『どんな人にも困りごとはある』⇒『多様性の理解』と強く関連する。
- ・実質的な理解を広めるためには、生活に密接した行動の体験をすることが効果的。
- ・相談支援事業所が、ケアマネのような情報提供の役割を担えるようにするための工夫は何か。